Title	「いのちを育むホスピスケア ： 死にゆく人たちに生かされて」報告（2013 年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催 ： スピリチュアル研究講演会）
Author(s)	関，智征
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 26-27
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4981
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2013年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催 スピリチュアルケア研究講演会 「いのちを育むホスピスケア ～死にゆく人たちに生かされて～」報告

司会・挨拶：窪寺俊之教授

2013年10月25日、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センターにより、講演会「いのちを育むホスピスケア ～死にゆく人たちに生かされて～」が開催された。講師は、細井順氏（公益財団法人近江兄弟社 ヴォーリズ記念病院 ホスピス長）で、〇〇名の参加があった。細井氏は、大阪医科大学卒業、自治医大消火器一般外科、淀川キリスト教病院外科医長を経て、現在、近江兄弟社ヴォーリズ記念病院ホスピス長。窪寺俊之教授の講師紹介に続き、さっそく講演に入った。講演は、細井氏自信のがん体験談から始まった。以下は、講演の概要である。

細井氏が、2004年２月初旬、スキーの帰りにトイレに行くと、どす黒い血尿がみられた。血尿は断続的に続き、尿路系のがんだろうと考え経過をみたが、２ヶ月後尿道に凝血塊がつまって排尿困難になった。３月末、やむをえず腹部CTを撮ったところ、右腎上極に８センチの腫瘍性病変が映っていた。４月に京都府立医大で開腹による右腎摘出手術を受け（ステージ２）、術後２週間で退院。それ以降は、抗がん治療は行っていないが、2012年４月時点では、では転移巣を確認できなかった。なお、手術前には「患者の気持ち　～インフォームド・コンセントのために～」と題した文章を、医師と看護婦に渡し、自身の気持ちを伝えた。細井氏は、自身のがん体験から、教えられたことがある、という。

１．誰でもがんになるということ
２．死を意識した時から本当の人生が始まること
３．医療者の一言の重さ、ありがたさ
４．ひとりでは生きられないこと
５．誰とでもお互い様と思えること
６．生かされて生きる人生
７．病気は悪性でも我が人生には良性

自身が医師の立場にいる時には見えなかったことが、がん患者になることで見えてきた。患者は、医師に思っていても言えないことがたくさんあること、医師のことばは、まるで神のことばのように患者には感じること、元気な時はなんでも一人でできる気持ちでいたが多くの人に支えられていたこと、患者どうしのリラックスした会話が必要なこと、などを知ることができた。その経験が、現在のホスピスでの医療・ケアにも役立っている。

現在、ヴォーリズ記念病院ホスピスは、いのち科と命名している。それは、一般的にホスピスという名称にマイナスなイメージがあることに対し

講演風景

て、いのちを見出してほしい、というメッセージが込められている。ホスピスでは具体的に、患者の気持ちに焦点をあてること、辛さ、せつなさ、やるせなさ、やりきれなさに付き合うことに焦点を当てている。患者は、「たらい回しにされているけど、自分の担当医は誰なんだ」「医師の言いつけを守ってきたのに、なんで自分がホスピスにいなくてはいけないのか」「こんなに苦しいなら、はやく死にたい」など、様々な感情を抱えている。その気持に寄添うことを目指している。そのために、病気の診断治療を問題解決の中心とはしない。むしろ、患者の気持ちに傾聴することに意識を集中する。そして、患者の人生最期の姿に接している間に、他人事とは思えなくなってくる。

医師には、２つの役割がある。１つは、病気を治し、苦痛を和らげる役割。もう１つは、患者と気持ちを通わせる役割だ。前者は、医療者として患者のために医療行為をすることであるのに対し、後者は、人として患者のそばに居て寄添うことである。

通常の臨床医療とは、患者の健康を取り戻すことが目的である。それに対して、ホスピス臨床とは、たとえ健康が取り戻すことができなくても、患者に死の意味を与えることだ。すなわち、生死を越えた「いのち」のありかを共に探し求め、永遠を想い、今を生きることがホスピス臨床の目的である。ホスピスは、いのちの臨床ともいえる。

木村敏氏の「関係としての自己」にあるような、あらゆる生命現象の根底に横たわり、すべての生物に通底する「いのち（生それ自身）」の通いあいを目指すのがホスピスである。患者の心の琴線に触れるような寄り添いこそが、いのちの臨床である。

なお、ヴォーリズ記念病院ホスピスを舞台にドキュメンタリー映画『いのちがいちばん輝く日』が2012年に制作され、2013年２月から全国各地で公開中である。ホスピスの現場から温もりのあるメッセージが届けられ、大きな感動を呼んでいる。

以上が、講演の概要である。その後、質疑応答が活発に交わされた。会場からは、「友人がホスピスにいるが、どんな声をかけたらよいか。かける言葉が見つからない」「残された家族へのケアは」「必ず死で終わるホスピスで、精神的な疲労はないのか」などの発言があった。

講演者：細井 順 先生

（文責：関　智征［せき・ともゆき］聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程２年）